

## 変わりゆく教会バザー

バザーアンケートから見える意識の変化



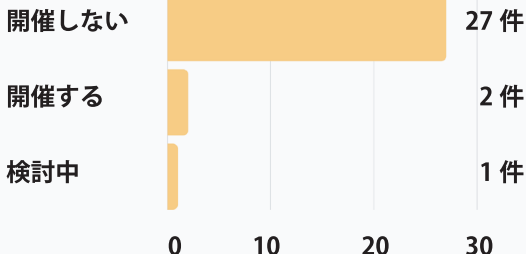
『大阪カトリック時報』では全小教区に向けて、バザーに関するアンケートを行い、29小教区から回答を得た。結果から見えてきたことは、コロナ禍によって、これまで水面下で進んでいたバザーに関する意識の変化である。

アンケートの結果、回答のあった小教区のほとんどが、今年バザー開催を見送っていることが分かった(図1参照。「開催する」は1件、「検討中」は2件)。その理由のほとんどはコロナ感染拡大に伴う緊急事態宣言の発出、公開ミサ中止によるものだ。

### ● コロナが収まれば再開するか？

この質問に対して答えた23件のうち、15の小教区が「開催する」と回答している。一方「いいえ」が4小教区、「わからない」が5小教区あった(図2参照)。

図① Q. 今年、小教区でバザーを開催するか？

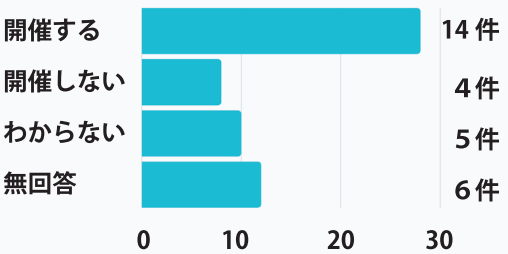


### ● バザーのあり方

その背景として、バザー中止の理由に、コロナ以外に「信徒への負担が重い(3件)」ことが挙げられ、バザーが抱える問題として小教区内の「高齢化(2件)」が指摘されている。

従来のバザーは「近隣との交流(3件)」、「信徒の親睦(2件)」、「支援のための寄付集め(2件)」、「教会の財政のため(2件)」などを目標として行われてきたが、「近隣との結びつきは日常的に行うべき」、「財政だけでは意味がない」、「重い負担に耐えてまでする意義があるのか」などの意見があるように、「物販(5件)」、「展示(3件)」、「飲

図② Q. コロナが収まれば、開催する予定か？



「このような現状の中で、バザーを再開するかどうかわからない」と答えた小教区のように、バザーをやめるところや見直しをするところは今後も増えるものと思われる。コロナがそれを後押しした格好になっている。

### ● 新しい試み

その反面、お知らせに「LINEアカウントを活用している」小教区、「多国籍の人びとや障がい者の交流の場」として盛り上がっている小教区、「オーブン・チャーチ・フェスタ」として、イベントを通して教会を地域に発信しようとしている小教区の取り組みもある。

今後、従来型のバザーは開催が難しくなるだろう。しかし、インターネットなどを取り入れ、発想を柔軟に変えることで、新しい教会らしい活動として取り組むことができる可能性がある。バザーは今、分岐点を迎えていると言えるだろう。

アンケートへのご協力  
ありがとうございました！

### ● バザーの頻度

「年に一回開催する」小教区は13カ所あり多数を占めるが、前述したように「すでにバザーを開催していない(2件)」、「二年に一回(1件)」、「不定期(1件)」、あるいは「ミニバザーとして数回の開催にしている(2件)」小教区もある。

飾磨、佐用、加古川、  
鈴蘭台、神戸中央、六  
甲、芦屋、夙川、仁川、  
伊丹、尼崎、豊中、箕  
面、高槻、茨木、吹田、  
大阪梅田、関目、香里、  
阿倍野、平野、大阪田  
辺、泉南、紀の川、浜寺、  
貝塚、熊取、和歌山紀  
北、新宮



## 「信仰の時間」

ABCラジオ(朝日放送)  
毎週日曜日 5:50~6:00AM

10月担当：中島 貴幸 神父  
(オプス・デイ属人区)

Ut Videam !

(24日放送分より)



エリコの町を出て行こうとされたイエスに、盲人バルティマイが、「ダビデの子よ、私を憐れんでください!」と叫びます(マルコ10・47)。イエスは、彼をそばに呼び寄せて尋ねました。「何をして欲しいのか」。バルティマイは、「主よ、見えるようになりたいのです」と訴えます。

「主よ、見えるようになりたいのです」。ラテン語では、「Domine, ut videam!」と訳されています。最後の二つの言葉、「Ut videam(見えますように)」は、一つの祈りです。

オプス・デイを創立した聖ホセマリア・エスクリバー神父は、オ

プス・デイを始める10年も前から、毎日、幾度も神に向かってUt videam! と叫び続けていました。ホセマリアは高校生の頃まではごく普通の若者でした。ところが、ある真冬の朝、前夜から降り積もった雪を踏みしめながら高校へ通う途上で、裸足の足跡を雪の上に見つけます。その足跡はカルメル会の男子修道士が残っていたものでした。神への愛のための犠牲である足跡を目にしたホセマリアは、胸騒ぎを覚え、ふと考えます。「神様のために、このような犠牲をささげている人たちがいる。自分はいったい何をしているのだろう」。そして、神が自分に

何かを求めておられることに気付きました。この時の胸騒ぎを聖ホセマリアは後に、「愛の兆し」と呼んでいます。

ホセマリアは神の御旨を探す熱心な祈りをささげ始めました。その祈りがUt videam! だったのです。神の御旨が見えることを願ったのです。そして、司祭になる道を選びます。まだ分からない神の御旨に備えるために、そうすることが望ましいと考えたのです。こうして最初の愛の兆しから10年が経過した1928年10月2日、神はホセマリアにオプス・デイをお見せになったのです。

あなたの人生はあなたのものではなく、世界を創造し一人ひとりの命の創造主である神のものです。しかし、人々は、人生は自分で切り開くものと考えています。また、自分の力で将来を築くために、未来についてできるだけ確かなことを知りたがります。つまり、自分の人生において自分が神であるかのように考えてしまいます。

しかし、人生とは思ひ通りにいかないものです。思い通りになる人生が幸せであると思うなら、ままならない日々の中で怒りや悲しみにとらわれてしまうでしょう。私たちは神ではないのです。全能の力を自分に期待してはいけません。そうではなく、いつくしみ深い父なる神、あなたの最愛の友であるキリスト、神の愛であり命の与え主である聖霊と親密に付き合いながら生きることが大切です。神があなたに何をお望みなのかをたずね求めながら人生を考えてみてください。今日から、Ut videam! とつぶやきながら日々を過ごしましょう。



聖ホセマリア・エスクリバー司祭